はじめに

今年度の学会長・比較文明学専攻主任は，春学期は阿部賢一氏，秋学期は私，林文孝が務めた．それぞれ，研究休暇入り，研究休暇明けというかたちである．

学会としての特記事項は，紀要編集においてプロの編集者への作業委託を行い，雑誌デザインも一新したことが一つ．これについては詳しくは編集後記にも紹介があろうが，実際に雑誌を手にとりながら，あるいはリポジトリでのPDF表示を見ながら，その新しさを実感していただきたい．もう一つは，秋の恒例行事である研究交流会において，はじめて学外のコメンテーター（歌人・東直子氏）に依頼したこと．本誌「研究交流会記録」欄にて，その実際のやりとりがお読みいただける．2011年度に新しい試みとして始まったこの行事だが，その積み重ねの過程で新たな領域横断性を開拓しつつある現場に，我々は立ち会うことができた．

そのほか，専攻主催の公開講演会，教員が関与した催しなどについては，比較的こまめに専攻ホームページで情報発信するようになってきた．ときどきチェックしていただけると仕合わせである．

教員の異動について紹介したい．まず新任教員として，年度当初に2名を迎えた．小野正嗣准教授と西谷修特任教授である．

小野正嗣氏は，東京大学教養学部，同大学院総合文化研究科でフランス思想を専攻，現代フランス語圏文学の研究によりパリ第８大学で博士学位を取得し，明治学院大学での教職を経て着任された．小野氏は，『ヒューマニティーズ 文学』（岩波書店, 2012年）等の著述をつうじて文学ひいては人文知全般の現代的可能性を意欲的に論じる学究であるかたわら，小説家としての活躍も目覚ましい．とりわけ，「九年前の祈り」（『群像』2014年9月号）で第152回芥川賞を受賞されたことは，今年早々の嬉しいニュースであった．その作品では，郷里である大分県南部に舞台の多くを求めながらも，土着性ばかりでなく現代社会独特の酷薄さをも背景に，ある種の普遍性をもった人間のどうしようもなさと一抹の希望が浮き彫りにされる．文学部文学科文芸・思想専修ともども，創作・批評分野において清新かつ強力な布陣が得られたことを喜んでいる．

西谷修氏は，言うまでもなく，現代日本のフランス文学・思想研究をリードする存在の一人である．東京外国語大学大学院総合国際学研究院

教授を辞して着任された．多くの著書・訳書については改めて触れるまでもないが，その思想研究が時事的現実と切り結ぶなかで鍛え上げられてきていることは特筆すべきであろう．ブログや雑誌記事，数々の集会をつうじて，沖縄米軍基地問題や「3・11」以後といった現実的課題についてなされた言論活動は，現代という時代を駆動する狂気や暴力を見据える鋭い視座がつねに伴っており，言論活動それ自体を通じてその視線の鋭さもまた研ぎ澄まされていっているかのようである．日常生活の領域と観念論との往還を要請する比較文明学専攻の理念にふさわしい，アクチュアリティに富む思想家をお迎えできたといえよう．

一方，片上平二郎助教は，今年度限りでご退任となる．片上氏は上智大学理工学部卒業後，本学他研究科などを経て，本専攻博士課程後期課程に入学し，博士学位を取得されたOBである．批判的社会理論を中心とする理論社会学を学問的軸足として，サブカルチャーに及ぶ現代社会・現代文化の多岐にわたる論題を論じ，また，文学部文学科文芸・思想専修兼任講師から引き続いての助教着任で，長らく本学の学生教育に取り組んでこられた．そのユニークな経歴は，本専攻がとりわけ初期に豊富にもっていた多様性を体現したかのようであり，また学部でも大学院でも熱意あふれる教育指導を展開して多くの学生を魅了してきた．2010年，片上氏が着任された頃の会話で，「自分がOBであるという立場はやはり意識して，先輩的な存在でもあるようにしたい」という趣旨のことを語られた記憶がある．その後の5年間，その言葉どおりのことを実行してこられたと思う．心よりお礼申し上げ，労に謝したい．

投稿規定にも定めたとおり，前号より本誌は立教大学の学術機関リポジトリ（立教Roots）に参加しているので，今後投稿・寄稿をいただくさいにはご留意をお願いしたい．リポジトリ化によって，より広範な読者が掲載論文に直接アクセスすることができるようになったのは大きなメリットであるが，どんなところで引用されても恥じる所ない水準を満たすべき責任も，よりいっそう求められることになろう．

読者諸賢には，紀要ともども，今後の立教比較文明学会の活動にもご理解・ご鞭撻をいただきたく，お願い申し上げる．

2015年1月

立教比較文明学会会長
立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻主任
林　文孝